高松短期大学紀要，19．51～57（1989）

幼児・児童の情緒反応の認知に関する基礎的研究

横川和章[1]

子供の気持ちを理解することは，親や教師のように常に子供と接する人間にとっては，必要不可欠で基本的な課題であり，家庭や幼稚園・小学校における大人と子供の相互作用において，保育者の側が，いかに子供の心情を理解してやるかということは，子供の健全な発達とその援助にとって，重要な役割を果たしていると考えられる。本研究は，子供の行動や感情の認知に関する基礎的研究として，特に，対人場面における幼児・児童の感情的側面に対する認知を大人がどのように行っているかに焦点を当てたものである。

他者の感情や性格をどのように認知するかという問題は，いわゆる対人認知の問題として多くの研究が行われてきた。その中でも，感情の認知に関しては，主に，表情などの非言語的行動と認知される感情・情緒との関連で研究されてきている。このような感情の認知を発達的に検討したものとして，表情写真の分類を6，7歳児と14,15歳児を被験者として行わせたEkman&Friesen（1971）や，5，6歳児を対象としたCamras（1980）の研究などがある。これらの結果は，表情に基づく情緒の識別は，かなり低年齢の段階でも可能であることを示している。しかし，表情の認知に関しては，表情以外の他の手掛かりも同時に利用できる場合，年少の段階ではかえって困難となり，視覚的手掛かりの重要性は年齢とともに増大していくとの報告もある（Burgental, Kaswan, Love, & Fox, 1970）。また，Harris, Olthof, & Terwogt（1981）は，6歳から11歳の間に子供自身の感情についての認識が，発達的に変化することを報告している。すなわち，年少の子供は，感情の外的，観察可能な側面に注目するのに対し，年長になると感情のより心的な側面をとらえることができるようになる。また，Barden, Zelco, Duncan, & Masters（1980）は，幼稚園児，小学3年生，小学6年生を被験者として，幼稚園児から小学3年生の間に情緒反応の予測におけるパターンに有意な変化が生じることを報告している。このような研究結果から，基本的情緒の識別は，かなり低年齢の段階でも可能であるが，また，同時に，幼稚園児から小学生へと年齢が進むにつれ，子供自身の中で感情のとらえ方が変化し，より精緻化された認知様式へと発達していくことが推測される。

では，大人は，このような子供の感情の発達的側面をどのようにとらえているのか。こうした異年齢間の感情の認知，特に，大人の側から子供の感情をどのように認知するかという点に関しては研究が少ないが，Zelco, Duncan, Barden, Garber, & Masters（1986）の報告からは，大人は，子供の感情を判断する際に，上述したような子供の発達的側面をほとんど考慮していないことが示唆される。彼らは，Barden et al.（1980）と同様の場面からなる情緒予測課題を大学生に対して実施した。その結果，大学生が小学生の情緒を予測する場合は，比較的正確であるが，幼稚園児の情緒を予測する場合は，幼稚園児自身が行った予測とは差異がみられており，幼稚園児に対しても，小学生に対するのと同様の予測を行う傾向があらわれている。

1　現所属：兵庫教育大学

本研究は，Zelco et al.（1986）の研究に以下のような修正を行い，子供の情緒反応を大人が，いかに予測・認知するのか，また，その認知の際に，対象となる子供の発達段階がいかに考慮されるものなのかを検討するものである。

Zelco et al.（1986）は，８つのカテゴリーからなる40の刺激事例を用いている。彼らの用いた刺激事例は，同年齢の他者との相互作用，または，親あるいは教師といった異年齢の他者との相互作用の混合した多様な事例からなっている。これは子供の経験する多くの場面を抽出したためであると思われるが，他者との関係性が異なり，そこで喚起される情緒を同じ水準で比較することが困難となる可能性を持っている。そこで，本研究では，同年齢の友人との相互作用場面に限定し，仲間関係によって生じる情緒反応に対する認知をより詳細に取り上げることとした。また,測度となる情緒カテゴリーについて，彼らは，選択可能な情緒カテゴリーを限定し，喜び，悲しみ，恐怖，怒り，無反応という５つのカテゴリーを用いているが，感情認知の研究における人間の基本的情緒に関する知見（Ekman & Friesen, 1975）や，また，基本的情緒そのものはかなり低年齢の幼児にも存在すること（Bridges, 1932）などを参考に，情緒カテゴリーを修正して用い，あわせて，対人場面における情緒カテゴリーの分類の問題についても検討を加えることとした。

方　法

被験者　短期大学女子学生１，２年生95名を被験者とした。内訳は，幼児の情緒反応を予測する条件に48名，小学生の情緒反応を予測する条件に47名である。

刺激事例の設定　対人相互作用場面を以下の基準により，40事例設定した。親和的場面として，自己又は他者による好意的，拒否的行動から事例を作成した。競争的要素を含む場面として，課題遂行場面を用い，自己又は他者の課題の成功，失敗からなる事例を作成した。各場面カテゴリーは各々５つの事例からなり，計40事例を刺激事例として設定した。８つのカテゴリーと各場面の事例の例については以下の通りである。

１）自己好意的行動場面（あなたはＡ子さんにおもちゃをかしてあげました）
２）自己拒否的行動場面（あなたはＡ子さんにきらいだといいました）
３）他者好意的行動場面（Ａ子さんがやさしくしてくれました）
４）他者拒否的行動場面（Ａ子さんがあそんでくれませんでした）
５）自己成功場面（あなたは，みんなのしらない歌をうたえました）
６）自己失敗場面（かくれんぼをしていて，あなたはすぐにみつかってしまいました）
７）他者成功場面（おえかきのとき，Ａ子さんがいちばんじょうずに絵がかけました）
８）他者失敗場面（Ａ子さんはみんなのしっている字をかけませんでした）

情緒カテゴリー　各刺激事例に対し，推測する情緒反応は，喜び（うれしい），悲しみ（かなしい），驚き（びっくりする），怒り（はらがたつ），恐怖（こわい），恥（はずかしい），嫌悪（いやなかんじがする），無反応（なんともかんじない）の８つのカテゴリーからなっている。なお，（　）内は，質問紙に記述された表現である。さらに，必要がある場合は，自由記述を選択することを可能とした。

手続き　幼児の情緒反応を予測する条件においては，まず，質問文と感情カテゴリーの例を呈

示した後，次のように教示した。〝このような質問文と同じ内容を，幼稚園に通っている5～6歳の女の子に質問しました。なお，質問文の中のA子さんとは，同じ幼稚園に通っている友達のことです。そして，この時どのような気持ちになりますかと質問し，その時の気持ちを［うれしい・かなしい・びっくりする・はらがたつ・こわい・はずかしい・いやなかんじがする・なんともかんじない］の中から選んでもらいました。子供がどれにもあてはまらないと答えた場合は，さらに，具体的にどういう気持ちかを答えてもらいました。5～6歳の幼稚園児はこのような質問に対してどのように答えたと思いますか。平均的な幼稚園児を想像してあてはまるものを選んで下さい。なお，どれにもあてはまらないと思う場合は，子供はどのように答えるかを想像して書いて下さい。〞

小学生の情緒反応を予測する条件においては，対象を小学校に通っている11～12歳の女の子とし，A子さんを同じ小学校に通っている友達として，教示した。以上の教示及び従属変数の測定は，すべて質問紙によって行った。

なお，質問紙の最後には，被験者の幼児又は児童との接触経験を測定するため，質問文の子供とほぼ同年齢の子供に接する回数を質問する項目が含まれており，ほとんど接したことがない，月に1回位，週に1回位，週に2回位，ほぼ毎日の中から1つ選択し，回答するよう求めた。

結　果

各場面における情緒反応の推測　各場面の情緒カテゴリーの中で予測される頻度の高かったものから上位5つを選択の比率で示したものがTable 1である。対象児の年齢による影響を検討するために，各場面においてそれぞれの情緒カテゴリーが選択された数を従属変数として情緒カテゴリーごとの条件間の比較を行った。その結果，選択頻度の高いカテゴリーにおいて条件間に有意な差がみられたものは，場面2の嫌悪と場面6の悲しみであった（それぞれ $p<.05$）。

Table 1
各場面における予測された情緒反応の比率

場面	条件	予測された情緒反応				
1	幼稚園児	喜び(47.92)	無反応(28.75)	恥(16.67)	嫌悪(2.50)	その他(1.67)
	小学生	喜び(41.28)	無反応(32.77)	恥(17.87)	その他(4.68)	嫌悪・驚き(1.28)
2	幼稚園児	嫌悪(32.50)	無反応(27.50)	怒り(16.67)	悲しみ(13.33)	恥(4.58)
	小学生	嫌悪(47.66)	無反応(22.13)	怒り(12.77)	悲しみ(6.38)	恥・喜び(3.40)
3	幼稚園児	喜び(87.50)	恥(4.58)	無反応(3.75)	驚き(2.92)	その他(0.83)
	小学生	喜び(83.83)	恥(6.81)	無反応(3.40)	驚き(2.55)	その他(0.85)
4	幼稚園児	怒り(44.58)	悲しみ(33.75)	嫌悪(12.92)	恐怖(4.17)	驚き(3.33)
	小学生	怒り(47.23)	悲しみ(32.34)	嫌悪(14.89)	恐怖(2.13)	喜び(1.28)
5	幼稚園児	喜び(83.75)	悲しみ(6.25)	驚き(4.17)	恐怖(1.67)	恥(1.25)
	小学生	喜び(82.98)	悲しみ(4.26)	その他(2.98)	恥(2.55)	無反応(2.13)
6	幼稚園児	悲しみ(44.17)	恥(38.33)	怒り(7.92)	無反応(4.17)	嫌悪(2.08)
	小学生	恥(44.68)	悲しみ(28.51)	怒り(11.06)	無反応(5.96)	嫌悪(5.96)
7	幼稚園児	驚き(24.58)	無反応(21.67)	その他(19.58)	怒り(16.25)	喜び(10.42)
	小学生	無反応(31.49)	驚き(21.70)	その他(19.57)	怒り(12.34)	嫌悪(7.23)
8	幼稚園児	無反応(52.08)	その他(12.08)	喜び(10.00)	悲しみ(10.00)	恥(7.92)
	小学生	無反応(60.85)	驚き(11.06)	喜び(9.36)	その他(9.36)	悲しみ(5.11)

注）その他は自由記述による回答を示す
（　）内の数値は%

以下に，各場面ごとの結果を概観してみる。場面1では，半数近くの反応が喜びであり，対象児の違いによる差はない。場面2では，予測される主要な反応は，ほぼ同じものが挙げられているが，小学生を対象とした予測が，嫌悪感情に集中しているのに対し，幼児においては，他に，無反応，怒り，悲しみ等の情緒へと分散されている。場面3は，他者からの好意的接触条件であるが，両条件とも，予測される反応は喜びに集中している。場面4は，他者からの拒否的場面であるが，ネガティヴな情緒反応が予測されており，その比率は両条件ともほぼ等しい。

場面5は，成功場面であるが，両条件とも喜びの反応に予測が集中しており，大きな違いはない。場面6は，失敗場面である。幼児に対する予測では，悲しみが第1位で，ほぼ等しい率で，恥の感情が選ばれるのに対し，小学生に対する予測では，悲しみの比率が低下し，恥の感情が第1位となる点で，対象児の違いによる条件間の差がみられる。場面7は，他者の成功場面である。この場面は，両条件とも最も判断にばらつきがみられる場面である。また，自由記述による反応が多い点も特徴的であり，判断の難しい場面であったと思われる。場面8は，他者の失敗場面であり，両条件とも半数以上の選択が何も感じないとなっており，条件間の差はみられていない。

以上のように，場面2と場面6では，主要な反応に条件間の差が見られるが，その他の場面では，予測される比率の高い情緒反応に関してはほぼ類似している。

自由記述反応の分析　自由記述反応の比率を各場面ごとに算出すると，場面1（3.16%），場面2（1.05%），場面3（0.84%），場面4（0.63%），場面5（1.68%），場面6（1.05%），場面7（19.58%），場面8（10.74%）となる。このように，場面によってその反応比率に違いが見られ，特に，場面7及び場面8に自由記述反応が多い。この両場面は，他者の成功または失敗の場面である。この両場面の自由記述の具体的内容を分析してみると，まず，場面7においては，〝すごい〟あるいは〝うらやましい〟との記述が多かった。前者は，この場面の自由記述反応数中52.69%，後者は37.63%にのぼる。また，場面8では，〝かわいそう〟という反応が圧倒的であり，84.31%を占めている。

幼児・児童との接触経験　被験者が判断の対象となった幼児又は児童と同年齢の子供と接した経験に関する質問項目についての結果は，Table 2に示す通りである。全体の60%の被験者はほとんど接したことがないと回答しており，両条件間に差はみられていない。

Table 2

各条件における被験者の幼児・児童との接触頻度

条件	ほとんどない	月に1回位	週に1回位	週に2回位	ほぼ毎日
幼稚園児	26	10	0	7	5
小学生	31	8	2	3	3

注）数値は人数

考　察

本研究で用いられた子供の対人場面の設定は，自己又は他者の好意的，あるいは，拒否的行動からなる親和的場面と，成功失敗からなる課題遂行場面から作られた。親和的場面として設定した3場面は，幼稚園児，小学生のいずれに対する反応も類似したものであり，認知内容に対象児の発達的特徴は大きな影響を及ぼしていなかったと考えられる。場面2においても，条件間の類似性がみられるが，小学生に対する予測が嫌悪感情に集中する傾向にある。同様に，課題遂行場

面に関する結果も，条件間の差は少ないが，特に，場面6における失敗に対する情緒反応の結果は注目すべきである。この場面における幼稚園児に対する推測で，最も頻度の高い情緒反応は，悲しみと恥の反応であると推測されているのに対し，小学生では，悲しみの反応は減少し，恥の反応が優位な反応と推測されている。このことは，失敗に対する子供の反応が，悲しみという失敗そのものに対する情緒的反応から，他者との関係で生じる恥の反応へと変化していくという暗黙の認知基準を反映していると考えられ，子供の情緒反応の予測の際に，子供の他者意識性の発達という視点が考慮された認知様式であるかもしれない。

以上のように，本研究の情緒反応に関する予測の結果に関する限り，認知者は，幼児と児童の反応をある面では，非常に類似したものととらえ予測しているが，場面6にみられるように他者との関係性の中での情緒発達を考慮した認知もまた行っている。したがって，Zelco et al.（1986）の述べるように，子供の情緒を認知する際に発達的な視点を全く欠いているというわけではないと結論できよう。しかし，この結果の差異が，両研究の刺激場面や情緒カテゴリーの違いによるのか，日米の幼児に対する発達観の違いによるのか，あるいは，それ以外の要因によるのかに関しては，現在のところ明確な結論は下せない。

また，自由記述反応の分析からは，本研究で取り上げた情緒反応カテゴリーが，場面によっては十分でなかった可能性が示唆される。特に，場面7や場面8での結果はこのことを反映しているかもしれない。場面7の主要な自由記述反応である〝すごい〟は驚きと他者への称賛の含まれた感情を，〝うらやましい〟は他者への羨望の感情を意味すると考えられ，また，場面8の〝かわいそう〟は他者への同情的反応を意味するととらえることができる。これらは，いずれも他者との関係を軸とする対人感情と考えられ，いわゆる喜怒哀楽を意味する情緒とは概念的には区別されるかもしれない。しかしながら，我々大人でさえ，種々の対人関係において，この両感情を分離して知覚することは困難な場合も多く，広く感情の認知の問題としてとらえることが必要であろう。また，発達的側面に関しては，情緒と対人感情の分化について子供の素朴な反応をもとに検討する必要があるだろう。

なお，本研究の被験者は，認知対象となった幼児・児童と同年齢の子供と接することの，比較的少ない学生であった。したがって，本研究結果は，そのような接触経験の少ない人間の認知を代表しているともいえる。この認知がどの程度子供自身の認知と一致しているかに関しては，直接，幼児あるいは児童に質問を行っていないため言及できないが，このような子供との接触経験の未熟な被験者でさえも何らかの形で対象児の発達的特性を考慮していたことは興味深い。本研究では，被験者数が少なく十分な比較を行えなかったが，このような接触経験は，幼児・児童に対する対人認知において，その認知枠を規定する重要な要因のひとつであることはいうまでもないだろう。したがって，今後，このような要因が幼児・児童を認知する際にどのような影響を及ぼすかを検討することは，幼児に接し重要な役割を担っている保育者にとっても大きな意義を持つものと思われる。

引用文献

Barden, R. C.,Zelco, F. A.,Duncan, S. W.,& Masters, J. C. 1980 Children's consensual knowledge about the experiential determinants of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology,* **39**, 968-976.

Bridges, K. M. B. 1932 Emotional development in early infancy. *Child Development,* **3**, 324-341.

Burgental, D. E.,Kaswan, J. W.,Love, L. R.,& Fox, M. N. 1970 Child versus adult perception of evaluative messages in verbal, vocal and visual channels. *Developmental Psychology,* **2**, 367-375.

Camras, L. A. 1980 Children's understanding of facial expressions used during conflict encounters. *Child Development,* **51**, 879-885.

Ekman, P.,& Friesen, W. V. 1971 Constants across culture in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology,* **17**, 124-129.

Ekman, P.,& Friesen, W. V. 1975 *Unmasking the face : A guide to recognising emotions from facial clues.* Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice Hall.

Harris, P. L.,Olthof, T.,& Terwogt, M. M. 1981 Children's knowledge of emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry,* **22**, 247-261.

Zelco, F. A.,Duncan, S. W.,Barden, R. C.,Garber, J.,& Masters, J. C. 1986 Adults' expectancies about children's emotional responsiveness : Implications for the development of implicit theories of affect. *Developmental Psychology,* **22**, 109-114.

<SUMMARY>

A fundamental study of adults' expectancies about children's emotional reactions

Kazuaki Yokogawa

This study was designed to investigate the adults' expectancies about children's emotional reactions, especially, the purpose of this study was to determine whether the factor of the age of children influenced on this prediction. Subjects were ninty five junior college students. They were presented vignettes describing eight types of experiences and were asked what would be either preschool children's or elementary school children's emotional reactions. Overall, adults did not so diferentiated their prediction as a function of the age of children. However in failure situation adults predicted that preschool children's dominant response would be sadness, on the other hand, in same situation they predicted that elementary school children's dominant response would be shame. Results were discussed in terms of adults' developmental views in the cognition of children's affect and the categories of emotional reactions.

高松短期大学研究紀要

第 19 号

平成元年1月31日　印刷

平成元年1月31日　発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01　高松市春日町960
TEL (0878) 41－3255
FAX (0878) 41－7158

印　　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地